

## 気象学会つくば大会 '97実行委員会からの報告

日本気象学会1997年度春季大会（通称、気象学会つくば大会 '97）が、筑波大学大会館を会場として1997年5月21日（水）～23日（金）に行われました。本大会参加者数は754名で過去最高となり、発表件数の346件（ポスター257、分科会89）も過去最高を記録しました（写真1, 2, 3, 4）。この春季大会の報告は講演企画委員会が既に行なっておりますが（天気7月号）、会員によるアンケート結果等を考慮した結果、大会改革として試行されたこのつくば新方式は次回以降の春季大会でも引き継がれることが常任理事会で確認されました。そこで、この新方式をより詳しく会員に理解してもらうために、準備段階の裏話を含めて実行委員会から見た大会の様子を写真を添えて報告いたします。

気象学研究の重心が気象庁を中心とする東京から、つくば研究学園都市に移ってきたことから、3年に1度はつくば地区で春季大会を開催することが決まりました（天気, 43, p.120）。常任理事会の呼びかけにより関東地区連絡会の筑波地区メンバーを中心に本大会実行委員会が立ち上がったのは、大会の18か月前の1995年11月末でした。安成大会委員長、米谷実行委員長のもとで、早速、筑波大学大会館の講堂（A会場1622名）、ホール（B会場357名）、国際会議室（C会場160名）、特別会議室（D会場120名）他、全ての会議室が予約されました。慣例では、4会場3日間というのが春季大会会場確保の条件となっています。

新方式では、大会での学術的議論をより活発化させるという松野理事長の強い希望により、一般発表はすべてポスター発表とし、それと平行して専門分科会を6セッション企画募集することになりました。最近の気象学研究の中から、特にホットなトピックスで6セッションもの専門分科会が行われるとなると、実行委員会が担当することになっているシンポジウムのテーマが専門分科会と重複してしまうという問題が出てきました。募集により専門分科会のテーマが決定し公表されるのは大会の半年前であり、それが決まってから落ち穂拾いのように残っているテーマからシンポジウムのテーマを捜すのは確かに問題でした。大会の

総会日に実行委員会担当のシンポジウムが割り当てられているのは、総会が成立するための人集めという裏の目的があるので、人が集まらないとそれは実行委員会の責任にもなるのです。専門分科会そのものがシンポジウム化しているなかで、実行委員会が落ち穂拾いのシンポジウムを横並びで企画するのは得策とは思えませんでした。そこで考え出されたのが、世界のトップ研究者を招聘し、シンポジウムに代えて特別招待講演を企画するというものでした。これなら、内容的に重複しても専門分科会とは一線を画すことができます。つくば大会はそもそも試行なのだから、この際未来を見据えて国際化を図るのもユニークな試行と考えました。理事長名、大会委員長名で協力者を捜した結果、Keith Browning 教授（University of Reading）と Robert Dickinson 教授（University of Arizona）にそれぞれ低気圧と関連する雲過程の講演と気候変動と関連する陸面過程の講演をお願いすることができました。司会は安成大会委員長が務め、コメンテーターとして藤吉康志（北海道大学）、高藪出（気象研究所）、小池俊雄（長岡技術科学大学）、佐藤信夫（気象庁気象衛星室）各会員を迎えて、「雲過程と陸面過程—21世紀への展望—」という見出しで特別招待講演を行いました（写真5, 6, 7）。つくば新方式の一環で行われた試行という位置づけですが、アンケート結果では、気象学会で国際会議のような体験ができて良かったという意見と、日本の気象学会なのだから英語で行うことは納得できない、との賛否両論の評価でした。

海外から著名なトップ研究者を招聘するとなると、かなりの資金が必要ですので、つくば大会実行委員会では秋の大会が終わる頃合を見計らって気象関連企業から賛助を募集しました。最終的には、賛助寄付金（17団体）、賛助広告（16団体）、賛助出展（22団体）という形で多くの賛助金が集まりました。今回賛助をいただいた団体のリストは、特別招待講演要旨集に印刷して公表してありますが、これらの賛助団体にはこの場を借りて深く感謝いたします。大会の当日、賛助出展会場には人が集まるようにコーヒーを置くなどの工夫を凝らしました。しかし、本大会参加者の多くはポス



写真1-4

写真5-8





写真9-12

写真13-16

ター会場と分科会会場の往復で時間にゆとりがなく、賛助出展会場に思ったほど人が集まりませんでした。この点については会場の配置の問題と合わせて、今後の課題です。

ここで、一般にはあまり知られていない大会の責任分担についてまとめておきます。大会を主催するのは学会で、年に1度の総会は理事会の庶務が担当します。ここでは学会賞や藤原賞の受賞式が含まれます。総会後の学会賞記念講演、藤原賞記念講演を企画するのは講演企画委員会の担当です。今回の学会賞は佐藤信夫会員、藤原賞は関口理郎会員に贈呈されました(写真8, 9, 10)。大会の中心であるポスター発表や専門分科会を企画担当するのも講演企画委員会の仕事です。総会後に受賞記念講演とともに開催されるシンポジウム(今回は特別招待講演)および懇親会は実行委員会が担当します。そして、会場の準備や設営、当日の運営や受付(写真11, 12)、賛助出展の対応も実行委員会が担当します。つくば新方式の試行に際しては、このように紛らわしい責任分担から生じるトラブルを避けるために、実行委員会に講演企画委員や理事が加わり、密な情報交換に努めました。

一般発表はすべてポスター発表にしたわけですが、ポスター発表を行ったことのある会員はそれほど多くないため、新方式では人が集まらないのではないかとの不安がありました。そのため、講演企画ではベストポスター賞を設けて、ポスター発表の活性化を図りました。投票の結果、第1回ベストポスター賞は大学院生の伊藤昭彦会員に送られ、6件のノミネート作品のすべてにはベストポスター賞の文字の入った学会特製のマグが贈呈されました(写真13, 14, 天気7月号)。当初、ベストポスター賞には学生賞とかアイデア賞、努力賞などを設け、若手を激励しようとの提案がありました。作品を見てわかったことは、準備にアイデアと時間をかけ、努力のあとがうかがえるポスターを掲示しているのは、大学院生に多いということでした。アイデアでは負けないが、忙しくて時間のない年配の研究者には不利に思えました。

最近、気象学会周辺では気象予報士が登場し、ウェ

ザー・ワールド'97を開催して話題になっています。気象予報士会もその会員数は1,000人を越えています。予報士には気象学会会員でない人が多いとの集計結果もあり、予報士に積極的に学会に参加してもらうことも、つくば大会でのひとつのチャレンジでした。そのため気象予報士会と実行委員会の合同企画として、大会最終日の午後に気象研究所見学ツアーが企画され、32名の参加がありました(写真15)。大会は平日に行われていますが、気象予報士の参加を積極的に望むのであれば、次回以降は休日にイベントを企画する工夫が必要かもしれません。

実行委員会にとって、大会最大の山場は何と言っても総会後に行われる懇親会でした。これが終われば実行委員会の役割はすべて終わったような気さえしてきます。今回懇親会に参加された方は211名でした。松野理事長から懇親会参加者に英語で挨拶がありました。これはBrowning教授、Dickinson教授に配慮してのことであり、英語での挨拶というのも初めてのことと記憶しています(写真16)。近年、気象予報士の登場や地球環境問題等で気象学会も多様化しており、時代の流れに対応して自らを常に改善してゆく姿勢が求められています。もしこれを怠り、しがらみの殻の中に取まってマンネリ化していたのでは、時代に取り残されてしまいます。したがって、たとえ不慣れでも手探りで新方式を導入し、未来を切り開くことが必要です。これは大会方式に限ったことではありません。今回の新方式がやがて旧方式と呼ばれるようになり、若い世代の人達により次の新方式が古い殻を破って生まれ出る日を待ち望んでいます。最後になりましたが、つくば大会'97を開催するにあたり多くの賛助団体から支援を頂きました。あつく御礼申し上げます。また、大会運営のための貴重な資料を提供してくださった丸山健人先生、筑波大学の諸先生、気象研究所スタッフ、託児所助成の新企画を積極的に推進くださった高藪縁会員、会場運営や受付に協力して下さった筑波地区の秘書および学生達にこの場を借りて感謝いたします。

(気象学会つくば大会'97実行委員会<sup>1</sup>)

<sup>1</sup> 菅田誠治(国立環境研究所)、千葉 長(国立防災科学技術研究所)、田中 博(筑波大学)、鳥谷 均(農業環境技術研究所)、中村 一(気象研究所)、西森基貴(筑波大学)、野瀬純一(気象研究所)、村上正隆(気象研究所)、安成哲三(筑波大学)、吉門 洋(資源環境技術総合研究所)、米谷恒春(国立防災科学技術研究所)